工事常識 材料の研究と着眼点

建築材料見積の研究（2）

林　有　一

經驗の深い林氏が、筆に委せて長い間の研究を此所に趣味的に書き出さんとするのである。總て工事の經營は着眼點が大切である。其の着眼點は林氏の如きでなくては得られない處があると思ふ。前號より精讀を乞ふものである。（編者）

需要供給の關係を木材の例で說明せば、內地に於ける木材の需要は、年々造材材積約四千五百萬石內外に上るといふことである、大正八年度の調査によれば

建築用材二千百十萬七千石を主として、パルプ用材二百十一萬六千石、包裝箱用材百七十七萬九千石其他を合計して、四千百四十六萬二千石となる、これが內地の需要木材の數量である、然るに內地の森林から供給し得るものは、需要の約五割六分で、不足分は北海道や樺太からの移入と、北米、西比利亞等からの輸入材で補充される、その內の大部分は北米材で、昭和元年の輸入數量一千萬石、昭和二年には、一千八十萬石、西比利亞材は昭和元年九十五萬石、昭和二年百六十七萬石にのぼつてゐる、これは主に建築用材や工業用材である。

かくの如く北米材や西比利亞材が、需給關係に於て重要な地位を占めてゐるのであつてその價格が內地材より低廉であるために、內地材の價格が騰貴しないのである、萬一それらの移輸入材が減少するか、或は全く杜絕する場合には忽ち平衡を失して

內地材の騰貴を來たし

品拂底のため容易に購買することが出來なくなるであらう。

東京材木問屋同業組合から發表する相場月報を視ると

昭和三年十月五日の標準相場として

青梅西川材（挽角）

杉十尺	三寸角	二等	一石	六圓七十錢
杉十三尺	三寸角	二等	一石	七圓三十錢
杉十尺	五寸角	二等	一石	九圓二十錢
杉十三尺	五寸角	一等	一石	十一圓五十錢
杉廿尺一廿六尺	四寸角以上	一等	一石	十六圓五十錢
檜十三尺	四寸角以上	一等	一石	二十二圓

『區劃整理に依る建築界は目先急速に進展し需要は多々益々增進し、土臺用として檜四寸角柱用として杉廿尺四寸角及十尺四寸角、母屋用として杉十三尺三寸角等、最も需要旺盛なるも、幸ひ產地秋山伐採期に際し相當の入荷を觀るため市場相場には格別變化無し』

これによつて市場の標準相場はわかるのであるが、大量取引で直接問屋から仕入れる外は小賣商によらねばならぬ、そこで小賣商の組合が發表する相場表も參考する必要がある、然し金融機關として銀行を利用し得るものは大資本家に限らるゝ實況であつて、充分な擔保もなく信用もない普通商人は、銀行よりも高利を拂つて、金貸業や問屋等から融通を受けねばならぬから、其高い金利が加はへられ